

● 日本繪畫史の研究 澤村專太郎著

亡くなつた澤村助教の生前雜誌その他に發表された諸論文の中日本美術史に關するものにして而かも編者に於いて特に力作と思惟したところのものゝみを輯め之をその内容の係はる美術史的時代の順に従つて編次せるもの、收むる所都て二十七編、卷頭に著者の遺影と遺墨風竹圖を掲げ別に著者の小傳と著作目錄とを附してゐる。

凡そ美術史の理解に於いて問題となるべきものは唯純粹に視覺的なる形式のみであるか、或は他の諸文化事象にも通じて存する民族的時代的個性としての所謂藝術意欲なるかは今日方法論的になほ決し難い困難なる問題である。前者がその理念としての純粹さに於いて論理的にはコンテクメントなるにかゝはらず、研究の實際に於いては多く困難を有し輒もすれば論者の著しく主觀的なる獨斷に陥る恐あるに對し、後者は論理的には一の循環論を豫想するが如くにして而かも實際に於いては却つて理解の深さと評價の妥當とを示すことが多い。今、本書の著者のとるところの方法も亦専らこの後者の側にある

紹介

が如く個々の繪畫的作品や流派の考察に於いて努めて方をその精神史的背景の闡明に致し、それらの作品の制作に働き、流派を動かしたつゝあつた思想感情その他種々なる文化的要因を窮めんとし、それが爲には繪畫そのものゝ告ぐるところ以外に多くを及ぶ限り自由なる文獻の利用に俟つてゐる。蓋し佛教文化の移入と共に始まり爾後永く常にその思想的基調の上に發達し來つた我國繪畫の理解の爲には何人もかくの如き方法を全然缺くことを得ないであらう。もとよりこの書は時を異にし意圖を違へて執筆された論文の輯録なるが故に、そこに著者の日本繪畫史に就いての全面的なる觀察は之を期待することが出来ないけれどもなほその取扱ふところは推古天平期の繪畫、平安時代の各種の曼茶羅、繪卷物、鎌倉室町期の肖像畫、近世の障壁畫、南宋畫並に西洋畫等に亘つて殆どわが國繪畫史の重要にして興味あるトピックを盡せる觀があり、而かもそれらの諸論文を通じてほゞ一貫した主動機存することは十分に認めえられる所である。即ち一方に於いては六朝以來隋唐並に宋元畫風の移入の意味

第十七卷 第一號 一三九

の理解と、他方に於いてはそれらの外來畫風の影響拘束から漸次解放されて自由なる國民的時代的感情の表現を達成し行く過程の探究が常にその中心的なる課題となつてゐる。而してその際働いた重要なモメントの一として著者の注意するところのものに我國の畫家が日々接したところの四圍の自然がある、著者はそのことをたゞに繪卷物に現出せる山水に就いて論證するのみならず、また近世の南宋畫の發展の上にもみようととして蕪村を通じて廣重にまで言及する、蓋し著者の最も得意としたところではなからうか。とまれ少壯胡夷の名によつて夙に詩人として知られた著者の好尚は繪を賞するに於いても常にその上に漂ふ主觀的なる詩趣とそを通じてその奥に存する畫家の内的生活とに注がれてゐたものと思はれる。而してその同一なる態度もその最も早き時代になる蕪村論と最後の推古期の繪畫とを比するときその間に著しい洗練の跡が認められるにつけてもなほ歳五十に満たずして逝いた著者が今更に惜まれると共に、せめては續いて公刊を約された東洋美術史に關する諸論文と、なほ望む

らくは晩年最も力を注がれたと聞く大和繪史論の講案の如きものゝ速に世に出でんことを願うて已まない。(菊判五五二頁、定價六〇〇京都星野書店發行)〔柴田〕

古社寺の研究

魚澄惣五郎著

京都を中心とする史學界の活動の著しき特徴の一は史跡調査であらう。これには凡そ二の原因が考へられる。

近畿が古き歴史の地たる結果顯著たる史跡に富むといふいは、歴史的理由がその一であり他は現代人が近畿について關心するところは大阪を中心とする旺盛なる經濟活動を除いてはまづこれらの史跡に觸れんとするにありとするいは、現代的要求がこれである。これらの二の事情は相合してその史學界を刺激しこゝに史跡調査の盛行を見るに至らしめたのであらう。

著者はこの方面に於ける先輩として既に多くの論攷を發表して居られるが今回これらを集成し古社寺の研究と顯して世にとはれたのは慶賀に堪へない。内に含む諸篇は嘗て一度人々の目に觸れたものであるがかく一書を成